

詩の中の宇宙——マルクス・マーニーリウス『アストロノミカ』研究——

竹下 哲文

公表用要旨

本論文は、紀元 1 世紀初頭のラテン詩人マルクス・マーニーリウスの『アストロノミカ』(*Astronomica*) を文学研究の見地から取り扱った論文である。この作品は、アウグストゥス(及びティベリウス)時代に成立したとされる教訓叙事詩であり、その当時に大きな関心を集めていた占星術を題材としている。従って年代的にはオウィディウスとほぼ同時期、いわゆるラテン文学黄金時代の後半に属している詩人であるが、それにもかかわらずこの作品が研究主題とされることは、近しい時代の他のラテン詩人たちと比べても、比較的稀であった。『アストロノミカ』という作品が持つ古典ラテン文学史とりわけ韻文の歴史における重要性、規模の大きさと内容の多彩さを考慮した際に感じられる、この奇妙なまでの研究上の過疎状況は、却って本研究に着手するひとつの動機となった。すなわち、文学作品としての『アストロノミカ』がラテン詩の歴史において占める位置を明らかにすること、そしてこの作品をその時代の文化的・思想的・社会的文脈の中で総合的に捉えることがこの研究の目標として設定される。このような視座から『アストロノミカ』を理解することで、この作品それ自体が持つ固有の価値が明らかになるだけでなく、先行する作品との影響・模倣関係の把握を通して、西洋古典文学史全体の理解に新たな光が投げかけられることになる。

以下に本論文の構成と各章の内容を述べる。

第 1 章では、まず『アストロノミカ』の成立年代をめぐる近年の議論を、Housman によるアウグストゥス・ティベリウス時代成立説の問題点を中心に確認し、その後、この作品の今日に至るまでの研究史を概観する。Scaliger や Bentley といった著名な学者たちがこの作品の校訂註釈に取り組んだこと、20 世紀初頭に碩学 Housman によって記念碑的な業績が上げられた一方、その難解かつ辛辣な筆致が却ってこの作品を「読まれざる古典」にしてしまった面があったこと、その後 Goold による英訳の刊行を経て英語圏でも研究熱が盛んになり、従来比較的継続して研究が行われてきたドイツやイタリアの伝統に加え、マーニーリウスへの関心が高まりを見せるようになったことが窺える。このようにして過去の研究の成果と傾向、問題点を要約したうえで、そうした研究史の中での本研究の課題と位置づけを示す。

第 2 章では、マーニーリウスが自らの主題と企てを述べた第 1 巻の序歌を中心的な検討対象とする。まず、詩人が繰り返し強調する「新しさ」のモチーフに注目し、それが文学的な常套という性格を持ちつつも、実際にそれまでの先行詩人との差別化を図っていること、

そしてマーニールウスの独自性が、とりわけ詩と題材の、単なる容器と内容のような関係を超えた、強い結びつきにあることを論じる。続いてそうした関係性が、『アストロノミカ』の主要な思想的背景の一つとされるストア派の思想とどのように関わっているのかを考察する。宇宙観・運命観の点でストア派の思想に依拠する部分が多いことはすでに指摘されているが、ストア派の文芸理論との関わりは部分的にしか顧みられていなかったため、その点に改めて検討を加える。最後に、そうした詩と主題（＝宇宙）の相関性・相似性を暗示するためにマーニールウスが序歌の中に織り込んでいる工夫を、具体的な詩行に即して分析する。

第3章では、前章で示した「詩の中の宇宙」というイメージについて、マーニールウスの重要な参照先であるルクレティウス『事物の本性について』における現れを検討する。まず、エピク羅斯自身が詩について持っていたどちらかというと否定的な考えを確認した後、特にこの学派の思想のローマ世界における受容において転換点となる重要な働きをなしたピロデーモスについて触れる。次いで、ルクレティウス自身の詩と哲学の関係についての考えを検討し、とりわけ原子と字母のアナロジーについて、これを単なる一時的な比喩に留まらない、作品全体に関わる意味を持つものであるとする一連の解釈を取り上げ、特にこの点を「反復と再生のモチーフ」と合わせて考察した Schiesaro の解釈を重視する（なお、この反復のモチーフの重要な例として第4巻の序歌があり、その個所が持つ本文上の問題点は付論の中で扱われる）。そのうえで、詩作品ないし書物と生を重ね合わせる比喩が、ほかならぬピロデーモスの詩人としての作中に見出されることを指摘し、こうした新しいイメージの継承の道筋を示す。

第4章では、まず『アストロノミカ』における神話的主题の扱われ方が持つ問題を確認する。すなわち、一方で星座の神話的起源にふれつつも、他方でそうした空想的な仕方で星々を説明することを批判して占星術的アプローチを展開し、しかし最終巻ではペルセウスとアンドロメダの物語を描く「小叙事詩」(epyllion)として再び神話的主题が取り上げられもしているという、一貫性のなさである。そこで、この問題に対して重要な貢献を果たした Saleme の研究を手掛かりとして、『アストロノミカ』の中の神話観、ならびに物語叙述における遊戯的性格に着目し、そうした技法が、問題となるアンドロメダ挿話の中で効果的に利用されていることを示し、マーニールウスの神話観の統一的な理解を試みる。更に、マーニールウスが擬似語源的文彩を好んで用いていることを明らかにし、写本の証言が割れどちらを選択すべきか議論のある箇所での読みの支持根拠を加えることで、本文批判にも関わる新しい解釈を呈示する。すなわち、「滴らせる」(exstillat)という稀で解釈の難しい語句よりも「持ち上げる」(extollit)という平易な異読を採用すべきとする主張が行われていた箇所について、「雫」(stilla)と「星」(stella)との間にある擬似語源的な関係が念頭に置かれていることを指摘し、文法的・文体的観点から「より難しい読み」(lectio difficilior)である前者をこそ採用すべきであるという議論である。

第5章では、『アストロノミカ』における人間と宇宙（ないし神）との相互関係をめぐる

Volk の研究を出発点として取り上げる。マーニーリウスは人間の知的能力の起源、その発展の原動力として神の好意・恩恵に触れる一方、その人間の理性による世界や天の把握を描くにあたっては攻撃的もしくは征服的とも取れる表現を用いている。この一見相反する態度の共存を理解するために、マーニーリウスにおいて前提される汎神論的世界観並びに文明史を取り上げて、人間と自然の関係という視点から、ルクレティウス『事物の本性について』やウェルギリウス『農耕詩』という先行詩人の作品との繋がりを検討する。これらの詩人との比較を通すことで、マーニーリウスが、技術と文明の発達をめぐる様々なモチーフを先人から巧みに取り入れつつ、先行作品にしばしば見られた悲観的要素を転換し、全体として非常に進歩的かつ楽観的な文明史を描き出していることが明らかになる。そしてマーニーリウスにおける上記のような態度が、詩的伝統を踏まえつつ独自の変化を加えた結果のものであること、またそれをよく表現した文明史の記述が、作品全体を通じて展開される知のプロセスとも関わっていることを示す。この一見したところ矛盾した視点の混在を、複数の題材を取り交ぜたために生まれた不注意の産物としてではなく、詩的伝統に則りながら『アストロノミカ』全体の記述意図に沿ったものとして捉えることが試みられる。

第6章では、『アストロノミカ』の中でも特に専門的な占星術の知識と技術を扱った第2巻から第4巻を議論の俎上に載せる。これらの巻は、その専門的性格上、文学研究の対象となりにくかったが、近年では「数学詩」的伝統から読解を試みる興味深い研究が発表されている。詩人と占星術師（＝数学者、*mathematicus*）を重ね合わせるイメージ、またとりわけこの作品のキー概念である「理性」（*ratio*）の「計算」としての側面を明らかにした先行研究を手引きとしつつ、『アストロノミカ』の中に頻出する計算表現とそこに込められた文学的意匠および記述意図を概観する。とりわけ、第2巻のドーデカテモリアの定義や第3巻でのホロスコープの算出法において、マーニーリウスの不手際か後世の竄入が疑われている箇所を、計算方法の変奏という遊戯的な演出として積極的に理解することを試みる。その上で、*ratio* という語が持つ歴史と意味の広がりや踏まえ、従来あまり考慮されていなかった金銭的な「勘定」としての *ratio* の側面もまた重要な役割を担っていることを示す。最後に、「計り知れない宇宙」（*mundus immensus*）を計り取る比量的理性そのものの計り知れない力が全巻を通じて効果的に演出されていることを明らかにする。

第7章では、『アストロノミカ』第4巻と第5巻に現れた地上世界描写に注目し、この作品の持つ「世界全体を描く」という企図、百科全書主義的性格を考察する。まず、ローマ世界において独自の展開を見せた百科全書主義の大まかな流れを示し、特にそれが顕著な現れを見せたローマ帝政初期における社会的・文化的状況を確認する。ついで『アストロノミカ』の中に記述された百科全書主義的諸要素を順次検討し、ローマを中心とした地誌理解、後の大プリーニウス『博物誌』とも通じる自然観、そして作品全体を通じて中心的な役割を果たす黄道十二星座のもつインデックス的機能を指摘し、『アストロノミカ』という作品が百科全書主義的伝統に属することを明らかにする。そして、献辞部分において皇帝が手にするに相応しいとされた宇宙そのものが、平和と秩序のもたらされた広大で多彩な現実世界

と呼応するように秩序付けられた形で詩の中に織り込まれることで、『アストロノミカ』という作品が「世界の写し」としての象徴的性格をそなえたひとつの文学的記念碑ともなっていることが示される。

こうした分析を通して明らかになるのは、『アストロノミカ』の思想的、文芸的背景の多彩さである。マーニーリウスにおける知的伝統と典拠の数々は、Volk に代表される先行研究によって示されてきたとおりであるが、第 6 章に見たようなごく近年になって注目を集めている「数学詩」としての性格や、第 7 章でふれた「百科全書主義」的要素など、これまで十分に検討されてきてはいなかった側面が存在することも確かな事実である。そして、各章における議論の全体から導き出されるのは、マーニーリウスという詩人がそうした多彩な思想や伝統、モチーフの数々を『アストロノミカ』という詩の中に一貫した構想と方向性をもってまとめ上げていることである。もちろん、純粋な知識ないし事実認識のレベルでの誤謬も少なからず見出されるほか、時として不必要なまでに晦渋な表現に陥ってしまっているケースもあることは否めない。しかし、一見したところ自己矛盾や一貫性のなさ映る記述であっても、異なる角度から考察を加えることによって整合的に解釈できる場合があるということもまた明らかである。しかもそのような見かけ上の矛盾に隠れた一貫性は、神話に対する態度や自然と人間の関係性といった、作品の根本思想とも関わるレベルにおいて実現されている。さながら、表面的には雑多で無秩序にすら映る現実の世界が実は神意と運命の掟に支配された調和的宇宙であるごとく、このような緊張をはらんだ諸主題が『アストロノミカ』という作品の中にはひとつにまとめ上げられているのである。